

書籍館

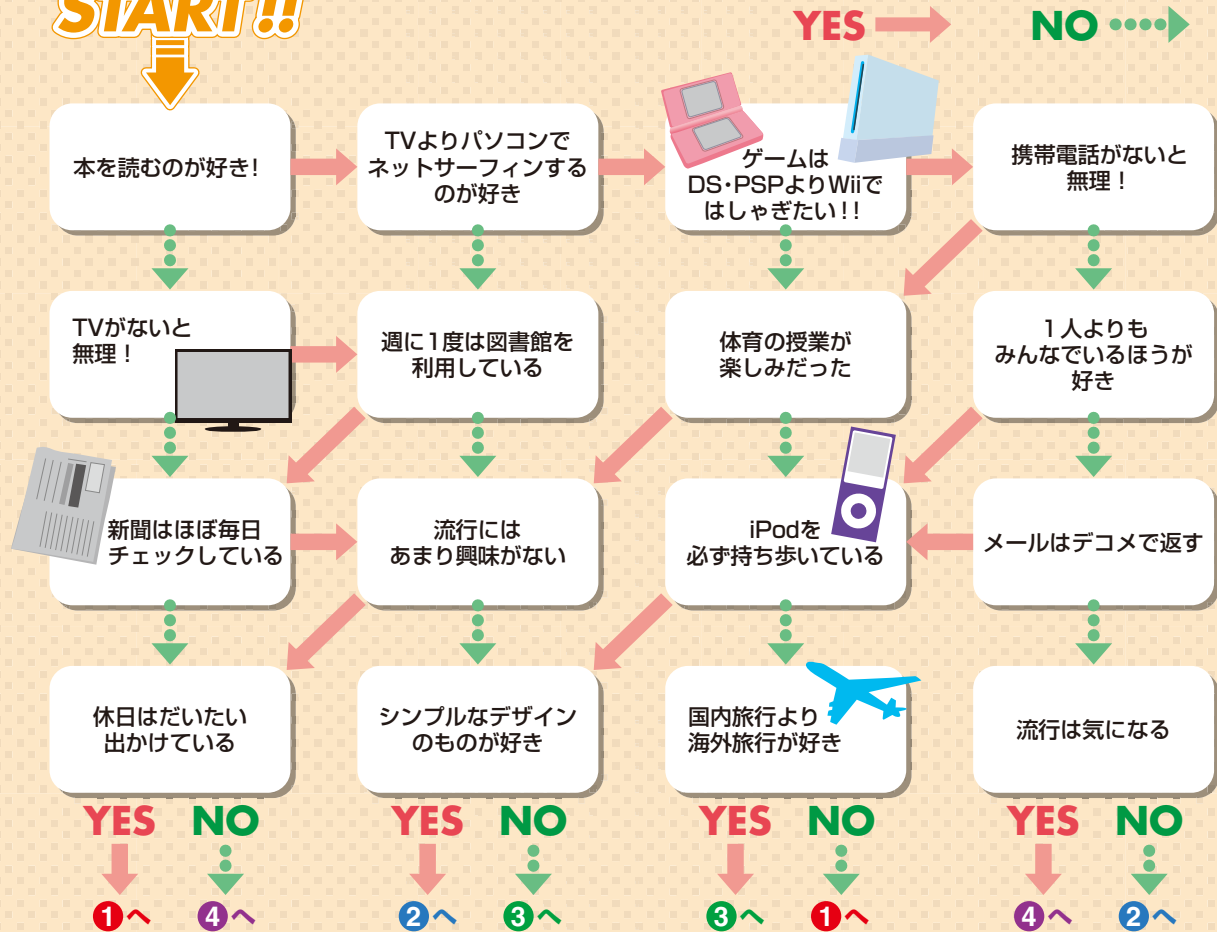


CONTENTS

図書館利用のススメ	2
社会学部 中村百合子先生	2
貴重室資料に触れてみよう!!	4
同志社大学 図書館実習レポート	5
図書館講習会のお知らせ	6
INTERVIEW1	
神学研究科 上原潔さん	8
展示紹介	9
文学者の生没年と出版	
文学部 真銅正宏先生	10

この心理テストにより判断される4つのタイプから今のあなたにおすすめの図書館情報をゲットしよう!

START!!



1 のあなたは……
図書館企画展示へ行ってみよう!!

今出川・京田辺の各館ごとに立地や学生構成の特色などに合わせてさまざまな企画展示を行っています。ぜひ、一度各図書館に足を運んでみて! 詳しくは9ページへ。

●詳細は図書館HPに
<http://www.doshisha.ac.jp/library/>

2 のあなたは……
図書館講習会へ行ってみよう!!

図書館では、情報を効率よく入手するため、今出川・京田辺各校地にて講習会を開催しています。ぜひ、参加してみてください!

●詳細は図書館HPに
<http://www.doshisha.ac.jp/library/skillup/index.html>

3 のあなたは……
EU情報センター(今出川図書館内)へ行ってみよう!!

同志社大学EU情報センターは、EU(欧州連合)に関するさまざまな資料を所蔵しています。ぜひ、EUへの理解を深めるきっかけにしてみてください!

●EU情報センターHP
<http://www.doshisha.ac.jp/library/eu/index.html>

4 のあなたは……
貴重書デジタルアーカイブ・特別コレクションをHPで見よう!!

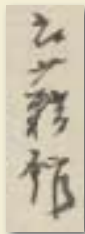
同志社に縁の深い山本覚馬や徳富蘇峰に関連した文書や書簡、江戸時代の後期に記された漂流記などの日本史関係史料、外国人による日本研究資料などを公開しています。ぜひ、HPを見てみて!

●貴重書デジタルアーカイブHP
<http://elib.doshisha.ac.jp/japanese/digital/index.html>

本冊子 名前の由来

1885年12月18日の新島襄の日記「出遊記」には、「書籍館」という言葉が記されている。これは同志社の初代図書館(現有終館)の定礎式に臨んだときのものである。

この図書館報の名称「書籍館」(しょじやくかん)は、新島がいた124年前の原点に戻り、同志社大学図書館を再考したいという思いから名付けたものである。



同志社大学 図書館報 vol.1 書籍館

2009年11月1日発行

編集・発行:同志社大学図書館
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
Tel:075-251-3960 Email:ji-gakjo@mail.doshisha.ac.jp
<http://www.doshisha.ac.jp/library/>



イタリア プレーシャのカピトリノ神殿の前で



通訳のアリーナさんと モスクワ川の前で

学びの道筋を自分で決める、 図書館利用のススメ

社会学部専任講師
中村 百合子 先生

図書館は、意外な出会い、
偶発的な学びの機会の宝庫です。



『シモネッタのデカメロン』
イタリア的恋愛のススメ！
田丸公美子著
(文藝春秋、2008)



『言葉を育てる』
米原万里著
(筑摩書房、2008)



『ブルーストとイカ』
読書は脳をどのように変えるのか？
メリアン・ウルフ著
小松淳子訳
(インターソフト、2008)

● 学びは過去の経験が大きく影響する

過去の経験が、今の自分の学びに大きく影響しているという考えは、多くの方がすんなりと受け入れられるでしょう。ここ20年ほど注目されてきた構成主義の学習論では、学びは、過去に獲得した知識を前提に、学び手自身が自らの世界に改めて知識と意味とを構成していくこととされます。私の場合は、ここ数年でいっきにこれが自らの学びについての理解として、実感されるようになった気がします。

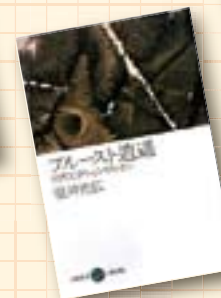
つい最近起きたことを例としてお話ししますと、私は今年、6月にロシア、8月にイタリアに、会議があって行ってきました。2つの旅は、それぞれに仕事を無事済ませることができ、エキゾチックな体験もして、楽しく充実したものでした。しかし、その旅行それ自体ではなくむしろ、イタリアからの帰国後の読書をおして、私のなかで色々な過去の経験や知識と今回の旅、そして読書から知った新たな事柄がつながってきて、「もしかして、わかってきたかもしれないぞ」という気持ちが一気にわきあがってきたのです。

● 小さな気づきが学びを豊かにする

イタリアで、イタリア語を同じく日本から来た元・司書の友人としていたとき、「イタリア語通訳だ」という田丸公美子さんという人の『シモネッタのデカメロン』を読んでみよ、中村さん好きだと思ふよ(笑)と言われました。帰国後に文庫版を入手して読んでみると、馬鹿馬鹿しくて確かにオモシロい。しかし私は、この文庫の巻末の「解説」にかけて、田丸公美子×米原万里が印象に残りました。米原さんは、ロシア語通訳の第一人者だった方ですね。それで、米原さんの本を次に読もうと検索してみると、国語科教育への関心から学校図書館研究に入った私には、「言葉育てる」米原万里対談集」がまず目にとまりました。これが、私にとって、過去にぼつぼつとなんらか経験したり読んだりして考えてきた、言語の教育、翻訳、共産主義などといったことについて、この夏のロシアと



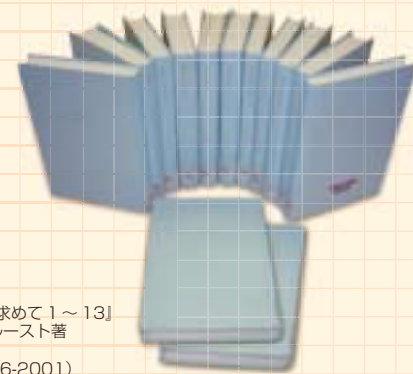
『批評と真実』
ロラン・バルト著
保刈瑞穂訳
(みすず書房、2006)



『ブルーストとイカ』
室井光広著
(五柳叢書、2009)



『少年H 上下』
妹尾河童著
(講談社、1997)



『失われた時を求めて1~13』
マルセル・ブルースト著
鈴木道彦訳
(集英社、1996-2001)

イタリアへの旅の経験とからまって、なぜかひとつにまとまって、「ひょっとしてこういうことかしら!？」という仮説がぞくぞく浮かんでくる一冊だったのです。米原さんは知っていたのに、「言葉育てる」なんてタイトルなのに、なんでこれまで読まなかったの!と、読んでいる途中で何度も思いました。

といったようなことを書こうかなと先日この原稿のことを考えていたら、今度は次のようなことがありました。イタリアの会議にご一緒した先生方とご飯を食べながらの雑談のなかで、『ブルーストとイカ』読書は脳をどのように変えるのか?という本が話題になりました。ですが、学校図書館を研究している私が、それを読んでいなかったどころか、その存在を知らなかったのです。一人の先生からは勉強不足だなぁと言われてしまいました。それで気になっていて、早く読まなければと思っていました。帰国後「シモネッタ」などで忙しくて放ったらかしになっていました。それをおとこの夜に思い出して、OPACを検索。と同時にその夜は、夏休みのうちに複数回読んでおくようにと先輩研究者に言われていた『批評と真実』を、これまた放ったらかしになっていたので(複数回どころか一度も読んでいなかった!)、まずいと思い、カバンにつこんで帰りました。そして翌朝、電車の中で一頁目を開いたら、「ブルースト」が言及されていてビックリ。むむむ、と、そこでしばしブルーストに思いをはせて止まってしまいました。それについてその翌日、今日ですが、今出川図書館で、愛読している『出版ニュース』を眺めていたら、『ブルーストとイカ』という本の書評が出ているのを見かけてしまいました。正直に言うと、実は私は、ブルーストについては『失われた時を求めて』の著者ということくらいしか知らないのですが、『ブルーストとイカ』や『批評と真実』は、ブルーストをもっと知っていたら理解が深まるでしょうし、今が私の、ブルーストを読む時期なのかしらと思いました。イタリアとロシアへの旅や、それ以前の学びと何かつながるものがあるのかも知れません。

皆さんにも、これに似たような経験は日常的にあるでしょうか?無いよ、と思った方は、たぶん、「気づき」を意識したらいいのです。そうした小さ

な偶然に気づき、それらをつなげて考え、自分のものにしていく、という態度が、学びをより豊かにするのではないかしら、と皆さんに問いかけてみたいと思います。自分の学びを点にとどめず、線はたまた網の目状にして、拡張させていくということです。ここで網ということ、リンクによって情報どうしがつながったインターネットが思い出されるかもしれません。ただ、学びは、単にリンクをし続ける、次々と本に手を伸ばすというのではなく、自らの世界に知識と意味とを再構成していくということで、思考を要し、ときに苦しく、決して単純、容易なことではないと思います。

● 図書館は偶発的な学びの宝庫

図書館の意義については、もちろん色々な説明があります。ですが、私に言わせれば、図書館のすばらしいところは、誰もあなたに何を読めなんて指示したりしないところ(アドバイスを求めれば、司書さんはしてくれると思うけれど)。図書館に来るといところからはじまって、自分で自分の学びの道筋を見つけることになる。反対に言えば、図書館は主体性を求めている、どの棚に行っても何を手に取るかは自分で決定しなければならぬのです。しかも、図書館は古いものもそんなに売れなかったものもひとつところに所蔵しているから、その知的探訪の奥深さは容易には想像できません。ただ、書架は主題(本に書かれた内容)によって並んでいきますから、図書館で本を手にとるときは、OPACを検索して見つけたお目当ての一冊だけで帰らずに、ついでに書架の上下左右の本も見てみてください。図書館は、意外な出会い、偶発的な学びの機会の宝庫です。

よく言われることですが、本との出会いも、人(著者)との出会いだと思えます。そして、私たちには必要な出会いが用意され、ひとりひとりの学びには少しずつ整合性のようなものがもたらされ、生涯で何らかの意味が構成されているような気がします。もっとも一方で、人は、自分の過去の経験をすべて否定しては生きていけないものだろうとも思えます。ですので、以上のお話は、みーんな、自分の人生に整合性と意味、つまり物語を見出したいわたくしが妄想で書き上げた、『少年H』のように、記憶違いか思い違いか嘘かがいっぱい入ったものかも知れません。

図書館からのお知らせ

UCLA図書館が利用できます!

カリフォルニア大学ロサンゼルス校と同志社大学で、図書館間の交流に関する覚書を交わしました。

それによって1ヶ月あるいは数週間と言った短期間の滞在の場合でも、UCLA図書館の利用が可能となります。

- 利用可能な対象者: 専任教職員、大学院生(学部生は不可)
 - サービス内容: レファレンスサービス、データベースの利用、コピー等資料の調査や研究に大いに役立つこととなります。
- 詳細は図書館までお問い合わせ下さい。



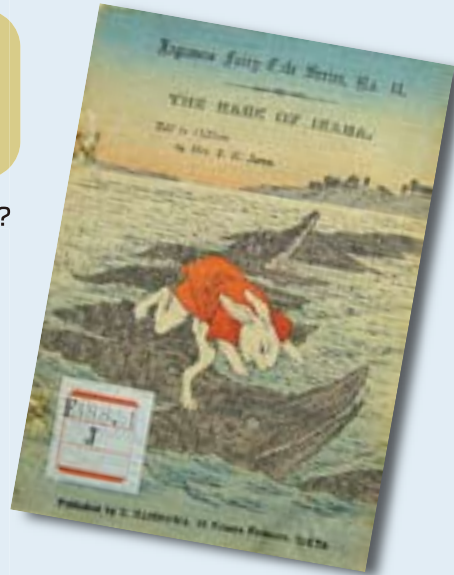
貴重室資料に触れてみよう!!

～明治期のちりめん絵本
“Japanese fairy tale series”～

皆さんは本学で所蔵している貴重書を手にとって見たことはありますか？貴重書は今出川図書館の貴重室で所蔵しています。今回はその中から、明治期のちりめん絵本“Japanese fairy tale series”の一冊である、“The Hare of Inaba”（因幡の白兎）を紹介します。

ちりめん本とは??

印刷した和紙をちりめん仕立てに加工（縮緬紙）した後、和綴り製本したものです。明治中頃から昭和初期にかけて、欧米諸外国人に日本文化を紹介する目的で製作、出版されました。初めてちりめん本を企画し、出版したのは明治17（1884）年頃、長谷川弘文社を立ち上げた長谷川武次郎です。「桃太郎」をはじめとする「日本昔噺」シリーズを発行して以降、「続 日本昔噺」シリーズや「絵で見る日本の人々の生活」など、日本の昔噺以外にも和歌、日本の風俗・習慣などが題材とされ、英語の他、いろいろな言語の翻訳版が刊行されました。



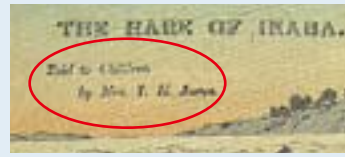
“The Hare of Inaba”（因幡の白兎） あらすじ
八十人の皇子が八上比売へ求婚に出かけた。その途中で、あわれな赤裸のウサギに会う。そのウサギは、隠岐国から因幡国へ渡るため、ワニを騙して海上に並ばせ、その背を渡ったが、最後のワニに騙したことが露見して皮をはがれていた。八十人の皇子たちの教えで潮を浴び、風で乾かしたため、いっそう苦しむ。このとき兄たちの袋担ぎとして同行していた八十一番目の弟、大国主命（おおくにぬしのみこと）が遅れて現れ、正しい治療方法を教わり、傷を癒す。ウサギは八上比売と国を得るのは彼だと予言し、そのとおりになる。動物報恩説話である。

英語圏では crepe-paper book と呼ばれ、欧米人が土産として購入して行ったようです。

手にとって調べてみましょう

翻訳者について

表紙に “Told to children by Mrs. T.H. James.” という記載があります。これは、ジェイムズ婦人が子供たちに語ったということですね。日本の昔噺の訳述



「The Hare of Inaba」同志社大学今出川図書館蔵

絵師について

奥付も見てみると、この絵を描いた人の署名があります。「鮮齋永濯」＝小林永濯という近世・近代日本画家です。

訳について

因幡の白兎は神話・伝承です。その時代にワニが日本にいたのでしょうか…？サメの古称をワニと言ったので、ワニザメのことを指すという説があります。この “The Hare of Inaba” については、絵柄はワニが描かれ、訳も crocodile になっています。ワニの姿を描いたものが始めて紹介されたのが江戸時代の『紅毛雑話』だそうなので、和瀨は架空の動物（海神、龍神のつかわしめ）という説もあります。また、「八十神」とはたくさんの神々という意味ですが、“the eighty Princes”（80人の皇子）と訳されています。



『紅毛雑話』同志社大学今出川図書館蔵

貴重室資料の閲覧について

ちりめん本を手にとって見る機会があれば、内容だけでなく、紙や文字の印刷、綴り方などもじっくり見てください。色もきれいで、手触りもまるで布のようです。しかし現在では、同じ紙を漉く原料が手に入らなったり、職人がいないなどの事情から、ちりめん本を複製することは難しいそうです。けれど、貴重室資料はしょうのうの香りが漂う図書館の奥の部屋で、誰にも触れられないように奉られている訳ではありません。本学にゆかりのある方々から寄贈していただいたものを、図書館職員は利用のために整理をし、大切に受継いで次世代の人々に見てもらえる環境を整えています。また、デジタル化して公開することにより、遠方や海外からも資料を見ることができ、より多くの研究に貢献することができるようになりました。



しかし、貴重室資料のすべてがデジタル化されているわけではありませんし、本物に触れてみて、紙質や色彩などを五感で感じることもよい経験になるでしょう。こうしてその資料が存在した年月分、過去に同じようにその資料を見た人々に思いをはせながら、当時のことについて探究していくのも研究の醍醐味ではないでしょうか。このような経験を通して、資料を大切に扱うことを、たしなみとして身につけてもらえれば幸いです。DOORSで検索し、興味のある資料がありましたら、一度手に取って見てみてください。



貴重室資料の閲覧方法については今出川図書館のカウンターまでお尋ねください。図書館ホームページの DOORSサブリも参照してください。
<http://www.doshisha.ac.jp/library/topics/13.html>

その他、貴重室にはさまざまな珍しい資料が所蔵されています。貴重室資料については特別コレクションとしてこちらのページに詳しく紹介されています。
<http://www.doshisha.ac.jp/library/collection/index.html>
一部の資料は、貴重書デジタル・アーカイブとして社会に広く公開されています。
<http://elib.doshisha.ac.jp/japanese/digital/index.html>

同志社大学 図書館実習レポート

図書館の職員でエキスパートといえば図書館司書です。本学司書課程で学ぶ学生たちが受けた同志社大学図書館での実習4日間を紹介しましょう。



1日目 まずはオリエンテーションから。

オリエンテーションのあと、選書の方法や目録の概要など、普段利用者が目にしない図書館内部の作業を実習します。1日の締めくくりは、ディスカッション。ちょっと緊張したかな？



あっと言う間の4日間。カウンターでは生き生きしている自分を発見したり、レファレンス実習では頭を抱え込むくらい苦戦したりと、そんなこんな実習期間でしたが、終わってみてやっぱり「図書館はいいなあ」と思ってもらえたのではないのでしょうか。この4日間が図書館司書を目指す実習生にとって充実したものであったことを願っています。

2日目 いざカウンターへ！ 図書館の顔、カウンター実習の始まり！！

注意事項を聞いた後早速カウンターに。図書館の一員であることを意識して、利用者サービスに徹します。貸出・返却業務も体験しました。利用者とのコミュニケーションはうまくいきましたか？



2009年度実習生受入先 (人)

公共図書館	49
同志社大学図書館	12
他大学図書館	2
学校図書館	3
国立国会図書館(関西館他)	2
合計	68

3日目 カウンター実習も二日目に突入

カウンター実習の次はレファレンス実習もあるんです。利用者からの質問や他大学からの所蔵調査にも対応。自分の所属外の学部生、大学院生からの質問もあって難しいです。ディスカッションで1日の実習を振り返ります。



図書館の利用価値を訴えたい！

文学部 八尾 穂波
初めてカウンターの内側に立ってみて感じたのは、図書館業務のすべてが利用者を第一に考えて行われているということであった。掲示物ひとつとっても、「少しでも図書館に興味を持って利用してほしい！」という熱意のあふれるもの。この貴重な経験を活かして、私も大学図書館の利用価値を多くの人に訴えていきたいと思う。

4日目 最終日は、京田辺ラーネッド記念図書館へ

だいぶ慣れたカウンター業務ですが、「両校地の図書館で質問される内容が違うなあ…」と実感。また、カウンターだけじゃない他館向けサービスや利用者教育のための講習会など、多岐にわたるサービスの実習をしました。そして最後のディスカッション。



『学ぶ場』としての図書館

経済学部 長友 未咲
膨大な蔵書に囲まれ、検索能力に長けた図書館員の方々と様々な業務をこなす中で、図書館と利用者が歩み寄って初めて「学ぶ場」としての図書館が成立することを実感した。そして、自分が図書館側のアピールをまだまだ感じ取れていなかったことを知るとともに、改めて図書館の利用の仕方を見つめ直す良い機会になった。

図書館講習会のお知らせ

両校地図書館では、みなさんの課題や研究に役立つ講習会を開催しています。秋学期は11月に開催が決定！講習会は個々の学習段階に応じて無理なくステップアップできるよう設定されていますので、これまで図書館を使っていなかったあなたも大丈夫！講習会を受講し、資料の活用上手を目指しましょう！

今出川図書館

情報探索の技

初級

30分で分かる

- 本の探し方
- 雑誌記事・論文の探し方
- 百科事典活用法
- 新聞記事の探し方
- 判例の探し方



情報探索の技

中級

90分でバッチリ

- レポート・卒論テーマ探索の術
- 洋文献へのアプローチ
—英語図書・雑誌を中心に—
- 判例・法令の探し方

プロが教える

- ウェブ情報の効果的利用法
- 政策・統計・経営資料の集め方
- 政府資料の集め方
- キーワード検索がわかる



データベース ～外国語文献の探し方～

- First Search(文理論文)
- Factiva.com(新聞)
- Lexis Nexis Academic(法律・新聞)

ラーネッド記念図書館

情報探索の技

初級

30分で分かる

- 本の探し方
- 雑誌記事・論文の探し方
- 百科事典活用法
- 新聞記事の探し方



情報探索の技

中級

90分でバッチリ

- レポートテーマ探索の術
- 科学技術文献の探し方
- 判例・法令の探し方

プロが教える

- ウェブ情報の効果的利用法
- 政策・統計・経営資料の集め方
- 政府資料の集め方
- キーワード検索がわかる

データベース ～外国語文献の探し方～

- First Search(文理論文)
- JDream II(理系論文)
- Scopus(理系論文)
- Factiva.com(新聞)
- Lexis Nexis Academic(法律・新聞)

講習会の詳細については、図書館ホームページ、携帯電話版DOORS、館内ポスターなどでお知らせしています。

- 同志社大学図書館ホームページ <http://www.doshisha.ac.jp/library/>
- 携帯電話版DOORS



PICK UP!

ウェブ情報の効果的利用法

情報探索の技

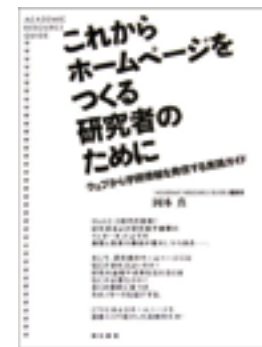
中級

「ウェブ情報の効果的利用法」と聞いて、検索テクニックを学べる講習会だと思われましたか？ この講習会はウェブを効果的に利用できるようになるために、特に検索エンジンを軸にウェブの仕組みを理解することを目的としています。実は小手先のテクニックよりもウェブの仕組みを理解することが利用上手への近道なのです。

講師はAcademic Resource Guide編集長の岡本真氏。1998年よりインターネットの学術利用をテーマにしたオンラインジャーナルを運営。他方、Yahoo! JAPANでウェブプロデュースを担当し、現在はデジタル情報活用のコンサルタントをされています。テクニックを知る機会が多いけれど、ウェブを丸ごと理解できる講習会はなかなかありません。ぜひ受講してみませんか？

読んでみよう!

『これからホームページをつくる研究者のために: ウェブから学術情報を発信する実践ガイド』(築地書館, 2006)
DOORS 大田図 第1開架 002.7||09422



春学期 受講者の声

- 既にインターネットのある状況で生活してきたので、ウェブをちゃんと理解することなく使っていた。この講習会に参加し、これからの学習や社会人になってからも活かせる知識を得ることができました。
- ウェブや検索エンジンについて知ることにより、できる事や限界を知る事ができ、使う時の心得を学べました!

キーワード検索がわかる

情報探索の技

中級



みなさん、普段DOORS、Yahoo!、Googleなどいろいろな場面で「検索」をしていると思います。そんな時思い通りにできていますか？ レポートのテーマそのままを入力してもヒットしなかったり、ヒット数が多すぎたり…どれが自分に必要な情報なのかわからない。そんな経験はありませんか？ 良い検索結果が得られるかどうかは、入力するキーワードやその入力の仕方に大きく依存します。キーワード検索の原理がわかれば、的確で網羅性のある情報を、誰でも効率的に探せるのです！

講師は藤田節子氏。著書は研究だけではなく、普段の情報収集にも役立つ幅広い支持を得ています。キーワードの本質や情報検索のしくみを楽しく解説し、情報検索の実践的な技術を伝授します。

読んでみよう!

『キーワード検索がわかる』(筑摩書房, 2007)
DOORS 大田図 開架 007.58||F9578、大田図 文庫・新書 CKS|||685

春学期 受講者の声

- 検索は毎日のようにしているので講習会を受けなくても分かっていると思っていました。けれど講習を受けて、これまでの検索では漏れてしまった検索結果がたくさんあったのだと、考えさせられました。
- 言葉の扱い方の難しさを痛感しました。色々な検索を試して、検索の練習をしようと思います。
- 今までの自分の適当ぶりが露呈された気分だったので、かなり刺激的でした!!



INTERVIEW 1

赤ジャンくんで活躍中の 神学研究科 上原 潔さん

記念すべき書籍館第1号に「情報教室補助員」として登場していただくのは、神学研究科の上原 潔さんです。正式には「情報教室補助員」という名称ですが、トレードマークに赤いジャンパーを着用していただいているので、「赤ジャンくん」と言うほうが学内ではピン!とくると思います。親しみを込めて「赤ジャンくん」と呼ばせていただきます。

—「赤ジャンくん」を志望した動機についてお聞かせください。

学部時代の教授から推薦されたというか、まあバイトの紹介をしてもらったと言う感じですが、それがきっかけです。今出川校地に引越したばかりで、やってみようかなと。それまでは人材派遣会社に登録して、短期アルバイトはやってましたが、長期のバイトは田辺に住んでいたころはしていませんでした。

— 図書館を始め学内のパソコン設置場所での活動をしていただいているが、「赤ジャンくん」になって体験したことを具体的に聞かせてください。

いろいろあります。例えば失敗談ですが、時間割を見誤って一般ユーザの皆さんを、うっかり一般利用教室から追い出してしまったとか。それから反省して、理解しているつもりでも何回も確認をとりますね。休講はないか、あるいは臨時授業が入っていないか、と。一番充実した体験は、難解な質問にうまく対処できて、利用者に感謝されることです。そのために、日々、研鑽を積むように心がけています。

—「赤ジャンくん」を長く続けていただいているとお聞きしましたが、利用者を通して感じたこと、また見てきたことは?

残念なことに、マナーの悪さは目立ってしまいます。飲食や談笑の注意をして逆ギレされることもあります。やっぱり同じ学生同士ということもあるのですかね。事務の方が注意されると態度がまったく違いますから。これは、学生同士、気軽に声を掛けられるという利点の裏返しですので、しょうがない部分もあります。ですので、素直に聞いてもらえるよう、注意の仕方には特に気をつけるようにしています。また、こうした仕事をしていると、自分自身も他で同じようなマナー違反をやっていないか反省します。いろいろと気づかされることは多いです。

— 利用者からはどんな「SOS」が多いですか?

主として授業準備とかプリンタの管理とか、黒子的な仕事が多いですが、利用者からは時期によって異なった質問を受けます。例えば、春先は授業登録の質問が多いです。試験期はワード、エクセルについての質問ですね。あと、最近はPCに精通している学生も多く、一回生であってもハイレベルな質問をすることが多くなりました。例えば今年度はパワーポイントについて、高度な内容の質問が多く見られます。難しい質問は赤ジャン同士で助け合っています。赤ジャン専用の情報共有システムを作り、それによって過去の質問データやトラブル処理を閲覧することができるようになったので、とても役立っています。

— 次に図書館のことも中心にお聞きします。上原さんは大学院生ですが、学生として図書館をよく利用するほうですか?

よく利用します。

— 同大生に「図書館利用のススメ」をお願いします。

偉そうなことは言えませんが、図書館のクオリティを高めるためには、図書館側の努力だけでなく、利用者が熱心に学術的な利用をすることが大事だと思います。例えば、レポート作成に真剣に取り組む事でも、最新の研究状況は見えてきます。そうした情報を反映させて、図書館は新たな文献や資料を購入する。その結果、図書館の質が高まっていくわけです。研究者・利用者と図書館との連携が密になるのが理想だと思います。

— 今後、もっとたくさんの学生さんに図書館を利用してもらうための「赤ジャンくん」としての提言があれば聞かせてください。

図書館は西門近くにあり、利用に便利です。ちょっとした調べ事をするのにPCを利用できます。PCコーナーの利用率も高いし設置場所、台数も良いと思います。試験期は混み合いますが、PCコーナーに来た人がそのついでに閲覧図書に手を伸ばせるようなシステムを構築できたら利用率が上がると思います。

— これから上原さんのような頼りがいのある「赤ジャンくん」をめざす後輩たちに「赤ジャンくんの心得」を一言お願いします。

PCの知識、技術も大事ですが、それ以上にコミュニケーション能力が必要となります。当座の問題を解決するだけではなく、ユーザが後々、自主的にPCを活用していけるようにアドバイスをすることが重要です。そのために、質問者がどのレベルで、何につまずいているのか、どのようにアドバイスすれば納得して頂き、以降、似たような問題に対処できるようになるのかなどを理解しなければなりません。こうしたコミュニケーション能力こそ、補助員の質の向上に求められていると思います。

— 最後に、「赤ジャンくん」として活躍された経験をどのように生かしたいですか?

コミュニケーションの難しさ、大事さ、マナー等を学びました。将来、教育関係に進みたいので若い人との接し方等、勉強になりました。この経験を生かしたいです。

— ありがとうございます。これからもヨロシク!

インタビューこぼれ話

赤ジャンくんは現在20名くらいです。院生が5~6名、学部生が14~15名です。学部は神学部、経済学部が多いですかね。留学生もいます。もちろん、京田辺は理工学部生もいます。まあ、僕は黒子的な存在、裏方的な存在なので目立たないのが一番ですかね。

— それにしては、その赤ジャン、目立ってますよ。(笑)

利用者のみなさんもパソコン操作で「困ったなあ?」「どうしたら…」と考えているとき、あの赤いジャンパーを見つけたら迷わず「SOS」を発信してください。必ず解決してくれますよ。「赤ジャンくん」になりたい方また興味のある方は、ITサポートオフィスの掲示板で募集のポスターを見ていただくか、直接ITサポートオフィスの窓口にお越しください。

展示紹介

同志社のシンボルマーク

時期 10月31日~2010年2月28日

場所 ラーネッド記念図書館2階展示コーナー

同志社大学の入学式、学校パンフレットなどで一度ならず目にする3つの三角の同志社のマークはいつのころできたのでしょうか。あるいはあの独特のマークはどういう形で、なぜあのデザインとして定着したのか。どうして紫地(ロイヤル・パープル)に白なのか。素朴な疑問を解明しながら今に伝わる各種のシンボルの使われ方、応用編をぜひ皆さんにみていただきたいと思います。

次回予告 2010年4月~ 「新島八重の生涯」(仮題)



永井荷風と藤蔭静枝の世界

時期 12月~2010年2月予定

場所 今出川図書館B1階展示コーナー

今年2009年は永井荷風の生誕130年に当たり、12月3日は彼の誕生日です。これに合わせて、「永井荷風と藤蔭静枝の世界」展を開催します。藤蔭静枝は、荷風の二度目の夫人であり、舞踊家として後に文化功労者となりました。この二人の芸術家の交流を、図書館の所蔵資料に加え、京都市在住の二代目藤蔭静枝氏提供の新出資料の書簡などを通して振り返ります。



永井荷風 藤蔭静枝

同志社大学図書館の歴史

時期 11月予定

場所 今出川図書館B1階展示コーナー

皆さん、同志社大学生として同志社大学図書館の歴史をどのくらい知っていますか。1876(明治9)年、新島襄が教員生徒に自らの蔵書を書籍縦覧室で公開し貸出を始めたのがこの図書館の始まりです。現在に至るまでの図書館の歴史を知ってもらい、より一層図書館を利用していただきたいと思います。



中野譜庫展

時期 2010年3月予定

場所 今出川図書館B1階展示コーナー

1985(昭和60)年、名古屋の音楽家中野二郎氏により、65年にわたって収集してきたマンドリンおよびギター関係の楽譜コレクションが寄贈されました。その15年後の氏の没後、さらなる資料が遺贈されて、質量ともに有数のものとなっています。

また、2009年度は同志社大学マンドリンクラブ設立100周年であり、その記念を祝しての展示でもあります。皆さん、是非とも足をとめてご覧ください。



永井荷風生誕130年 および没後50年に 当たって

図書館長・文学部教授
真銅正宏 先生



今年2009年は、著名な文学者の多くが生誕100年を迎えて話題となった。大岡昇平、太宰治、中島敦、花田清輝、埴谷雄高、松本清張、それから森鷗外の次女小堀杏奴もその一人である。各地の文学館などで、これらの文学者をめぐる記念展が行われている。

生誕100年というのは、50年とも150年とも違い、ちょうどいい時間の距離感を人々に感じさせるのであろう。まず数字としてキリがよい上、既にこのうちのほとんどが亡くなっているために、ある程度自由な発言が可能である。その一方で、生前の彼らと出会った人もまだ多く残っている。雑誌の記念号を編むにしても、企画の材料は豊富にある。

ところで、出版などの世界では、これとは別に、さらに重要な記念の年がある。没後50年である。没後50年で、著作権保護の期間が終了するとされているからである。

著名な文学者の場合、その著書が再刊されたり、新しい本や雑誌特集号が企画されたりすることも多い。またこの時期に至れば、文学史上の評価もある程度安定する。

今年、没後50年を迎える著名な作家に、永井荷風がいる。80才で



永井荷風(1954年6月)



左:『荷風全集 第一巻』(春陽堂元版, 1918)
右:『新編ふらんす物語』(博文館, 1915)

亡くなったので、生誕130年でもある。岩波書店版の新版『荷風全集』も再刊され、補巻が加わる予定であるし、『文学』(3・4月号)を始め、多くの雑誌が荷風の特集号を出している。

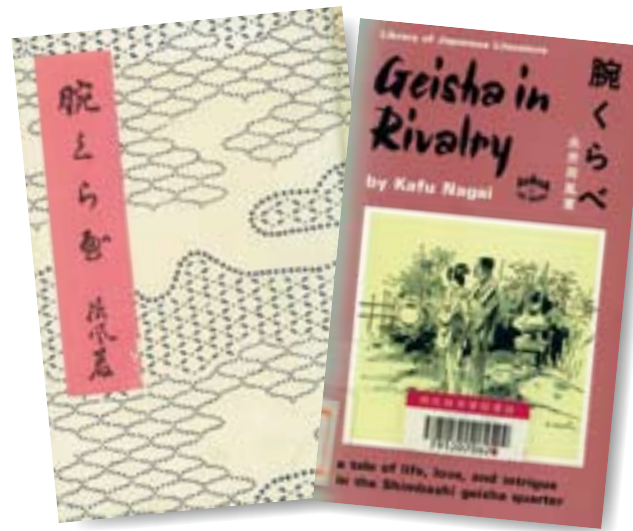
作品の出版には、さまざまな契機が働き、認知される時期にもいくつかの波状の推移がある。文学史は、作品がまず発表された初出時を基準に、位置づけられる。しかしながら、その作品が書かれた時期と、出版の時期は、必ずしも近接しない。戦争などの大きな出来事があればよけいに、大きくずれる。

また、小説は、雑誌や新聞に初出の後、通常の場合時はをおかず、単行本としても刊行される。ただし、多くの時を経る場合もある。さらに、文庫本化され、廉価になって市場に出まわることもあるが、この時に初めて多くの読者を得る場合もあろう。また、著名な作家の場合、通常は死後であるが、一部は生前にも、作品集や全集が編まれ、作品が再び世に出される。問題は、これら複数の発表形態の間で、作者の意向や出版社の都合などにより、本文が大きく書き換えられることがある点である。戦争などの非常時や、検閲の程度の違う時期に出されたものは特にそうである。したがって、文学史における作品の位置づけを初出時に限る現行の方法には、危険な落とし穴がたくさんあるといえる。

永井荷風の作品も、複数の版を持つものが多い。また、花柳界を始め、男女の関係を多く描く作風や、文明批評や時の政府への反抗的発言を多く含むため、版によって、

伏せ字や削除などがあり、出版当時の事情の相違から、多くの作品が複数の異本を持つ。写本が中心の古典文学では当然であるこの異本の存在は、近代文学においても、まま見られるものなのである。荷風の同じタイトルの本を見ても、それぞれ、多かれ少なかれ、相違を含んでいる。特に著名であるのは、『腕くらべ』や『溼東綺譚』、戦後まもなくの『問はずがたり』などの数々の異本である。また、『ふらんす物語』など、当初発売頒布が禁止され、『新編ふらんす物語』(博文館, 1915)という改版が出された後、時代を経て、元ものが復刻出版されたもの(日本近代文学館, 1968)などもある。

さらに、荷風ほどの人気作家になると、全集や作品集も、生前から、何度も出されている。生前のものは当然、その年までの作品に限られ、かつ、作者自身によって、選ばれたものに限られる場合も多い。当館にも、いわゆる春陽堂元版『荷風全集』(1918~1921)から、春陽堂重版『荷風全集』(1925~1927)、また、稀覯本などの貴重な本文を集めた東都書房版『永井荷風選集』(1956)、さらに、



左:『腕くらべ』(日本近代文学館, 1969)
大今図 B2階書庫 913.6||N-4

右:『Geisha in Rivalry』(C.E.Tuttle, 1963) [『腕くらべ』英訳版]
大今図 B2階書庫 913.6||N-4A

中央公論社版(1948~1953)、岩波版(1962~1974)、岩波新版(1992~1995)の全集が所蔵されている。

文学作品を、このような版の違いや異本関係で読み比べてみるのは、極めて興味深い読み方である。そしてそれは、これまでの単純な作品羅列による文学史の、大いなる組み替えに繋がるかもしれない。

そのためにも、図書館には重要な役割が求められている。例えば、一つの版があるから別の版は不必要であるというような、予算重視の狭隘なルール作りではなく、限られた予算の中で、必要に応じては多くの異本をも収集できる、明確な目的意識に基づく書籍の収集である。また、そのためには多くの図書館間の連携による棲み分けと、予算の効果的執行も必要であろう。今後の図書館は、資料を保存するだけでなく、資料同士を関連づけ、より有効に活用できる仕掛けを、作り出していかなばならないと考えられるのである。



左:『溼東綺譚』(日本近代文学館, 1969)
大今図 B2階書庫 913.6||N-3

右:『A Strange Tale from East of the River and Other Stories』(C.E.Tuttle, 1972) [『溼東綺譚』他 英訳版]
大今図 B2階書庫 913.6||N-3A